

## 1.

アジアの日本研究の現況をのべよ、ということですが、これからお話をすることは、あくまで私の狭い体験の中で感じていることをお話するもので、もっと広い視点からお話しできる方が他にいらっしゃると思います。それも、わたくしが親しくさせていただいているのは、韓国・中国の日本研究者の方々ですので、それ以外の地域、たとえば台湾やシンガポール、インドなどが除外されていることをお断りしておきたいと思います。また、韓国に関しましては、昨年9月まで一年間滞在して在外研究をする機会を得ましたので、比較的新しい話が出来ると思いますが、中国に関しましては、かつて2000年に北京日本学研究所に半年ほど派遣されたことがあり、また毎年のように学会・シンポジウムで報告させていただいていますが、最近は滞在しているわけではなく、また急速に変容を遂げつつある中国のことでありますから、やや古い報告になるかもしれませんが、その点はご了承願えれば幸いです。したがって、この報告では韓国を中心としてお話し、中国にはそれとの関連で言及させていただく形としたいと思います。

さて、韓国ですが、はじめにデータからご紹介申し上げます（以下は李盛煥 [イソンファン] 『韓国における日本地域研究』『啓明大学校日本学科創立30周年記念大会報告集』2007による）。1970年代において、韓国には日本学関連の学会は4つしかありませんでした（韓国日本学会・韓国日語日文学会・現代日本学会・韓日法学会）。80年代に韓国日本語教育学会、日本研究学会、韓国高校日本研究会などが設立されますが、それでも合計7つという状況でした。これが大きく変化するのは、90年代からで大韓日語日文学会など14もの学会が新たに設立されます。私が関係している韓日関係史学会、韓国日本思想史学会、韓国日本史学会などもこの90年代に設立されています。大学の日本学関連の学科ですが、日語・日文については60年代には2校しか設置していませんでしたが（韓国外国語大学校と西京大学校）、70年代に12校、80年代に22校が設置し、現在では200近い大学（2004年度の統計では四年制大学は171、そのうち国立大学は24）の約90%に設置されるに至っています。語学教育ではなく、日本研究という点でいえば、初めて日本学科を設置した大学は啓明大学校で1976年のことでした。その後90年代前半までに5~6校が設置しますが、一挙に増加するのは90年代後半で12校に設置されます。これに伴って、大学の付属日本研究所も少しずつ増加し、現在ではソウル大学校、翰林大学校、高麗大学校、東西大学校など10大学程度に設置されています（これは、HKなどの韓国政府の競争的資金によって、もっと増えているかもしれません）。日本語教育ですが、大学では（4年制と2年制を合わせて）第二外国語として修学する学生は2000年までに20万人に及んでおり、高校ではもっと多く73万人以上が学んでいます（大学生数は二年制・大学院を合わせて2007年度で3037433人です。大学進学率は80%を超えています）。

同様に中国ですが、まずやや古いデータですが、国際交流基金が設立した北京日本学研究所が1999年に『中国における日本研究』という大変詳細な資料集を出しています。それによると、中国全土には98カ所の日本研究機関が存在し約1600名の研究者が在籍しています（これは現在ではもっと増加していると思います）。設立時期ですが、50年代に3

カ所、60年代に13カ所、70年代に13カ所、80年代に29カ所、90年代に40カ所で、こちらも90年代以降に飛躍的に増加していることが分かります。日本関係の学会は、90年代末までに43あり、これも90年代以降に飛躍的に増加しています。主な学会としては、中華日本学会、全国日本経済学会、中国日本文学研究会、中国日本史学会、中国中日関係史学会、中華日本哲学会、中国日本語教育研究会、中日比較文学研究会、中国抗日戦争史学会などがあります。創立時期が一番早いのは、全国日本経済学会ですが、一番大きい学会は中華日本学会で、こちらは約1500名の会員を擁しています。中国の学会の特色は、やはり国家が広いことを反映して、地域別の学会が数多く組織されていることで、上海市日本学会、東北地区中日関係史学会、青島中日経済文化研究会、山東省日本学会、吉林省日本研究学会、天津市日本経済学会、北京市中日関係史学会、北京市中日文化交流史研究会などがあります。日本語教育機関に至っては、これは2006年の国際交流基金の調査に基づくのですが、全国に1544の教育機関があり、約70万人が日本語を学んでいます（こちらは初等教育から大学まで全てを含みます）。大学だけでも882の大学で407603人が日本語を学んでいます。ちなみに、中国の教育部が公表しているデータによれば、中国には2007年までに1909校の大学があり、2005年の『人民日報海外版』によれば、学生数は約400万人ということですから、約10%の学生が日本語を学んでいることになります。日本語学科をもつ4年制大学は2005年までに217校に達しており、こちらも全大学の10%強ということになります。韓国の90%と比較すると少ないようにも思えますが、それでも無視できる数字ではないと思います。

さて、次に内容の話に移ります。以上のように韓国・中国共に、日語・日文に関しては、大変多くの学生・研究者があり、殊に90年代以降に爆発的に増加したということがいえると思います。このことは、無論日本と韓国・中国の経済的結びつきが強くなり、それに応じて日本と関係する企業や日系企業への就職、あるいは観光関連で就職する機会が増加したことが背景にあると考えられます。一方、これと対照的なのですが、日本学関連については、未ださほど多くないという傾向が窺えます。無論、これも90年代以降に増加し、少なくとも量的にはかなりの日本研究が登場している傾向は指摘できますが、それでもやはり日語・日文関連に大きく偏っていることは否定すべくもありません。この意味では、日本研究については、まだまだこれからという状況があります。

その中でも、韓国に関しては、日本研究が21世紀に入ってから大きく変容しつつあります。従来は、日本の植民地支配からの脱却という観点から、日本に対する強い拒絶感があり、韓国の自立・自律に重点を置いた視点が強かったと思います。いわば、韓国の民族的主体性に力点を置きつつ、植民地時代の日本の痕跡をどのように払拭するか、という視点から日本研究が進められてきたといえます。植民地時代の日本が韓国の近代化を阻害し、もっぱら収奪に終始したという主張から、これは一般に「収奪論」といわれてきました。ところが、最近では、植民地時代に体験した近代という視点から日本の支配を捉え、近代批判の一環として日本との関わりを捉えるという視点が登場しています。「収奪論」に存在していた近代肯定的＝近代主義的性格を批判すべきだとする研究動向が現れるようになったのです。それは今日、「植民地近代性」論とよばれています。植民地主義と近代性を表裏一体のものとして捉え、近代自体が有する権力性やヘゲモニー的な近代化の面に注目する研究です。それはまた、日本の植民地時代の近代化を肯定する議論とも類似のものにみえ

(これは近代肯定論の立場から日本の植民地支配に居直っている議論であり、対極の議論なのですが)あるいは植民地支配の暴力性や民族主義の役割を軽視しているようにもみられ、その点から激しい批判も招き、日本側の朝鮮・韓国研究者・韓国側の日本研究者を巻き込んだ論争に発展しています。

わたくし自身は、「植民地近代性」論が提起している問題は率直に受け止めつつ、しかしながら植民地支配・植民地近代のヘゲモニー的な暴力性をあくまで直視するという立場に立っています。やや折衷的なのですが、それはさておき、この論争が日本研究の方法的議論として発展することで、日本研究の質が飛躍的に高まったことが注目されます。そして、ポストモダンの議論も含み込んだ、その意味では欧米の植民地支配の議論とも交流できる開かれた日韓関係論、日本論となってきたことにも注目しています。従来のある意味で日韓関係の中に閉じ込められたステレオタイプ的な日本研究とは異なり、広く国際的な視点から日本、日韓関係を捉える段階に入ったとあってよいかもしれません。また、日本人の研究書も現在では数多く韓国で翻訳・出版されています。私の関係しているところでは、丸山真男は無論のこと、子安宣邦、姜尚中、安丸良夫など新しいものも直ちに翻訳版が出ています。ネグリ&ハートの『帝国』など、最近の人文社会科学に影響を与えている著書も、むしろ日本よりも早く翻訳が出ているほどです。情報的にも日韓はかなりの部分共有しうる段階に入っているとあってよいかもしれません。この点も、韓国の日本研究の発展に大きく寄与していると思います。

もっとも、韓国での日本研究には、未だいわゆるステレオタイプ的な要素も強く作用しているように見受けられます。それは、日本の植民地支配の問題、ポストコロニアルの問題について、日本側が真摯に受け止めていないことと関係しているとわたくしは考えています。いわば、日本はいつ侵略してくるか分からない他者として存在しており、日本研究もそれに規定された部分があるということです。たとえば、今年の韓国日本思想史学会ですが、わたくしが韓国に滞在していたこともあって、基調講演を依頼されました。その際のテーマは、「日本人の価値観」というかなりステレオタイプ的なものでした。そこでは、「武士道」などがテーマになっていて、わたくしも大いに驚いたのですが、注意深く聞いていると、単なるステレオタイプとは異なる側面があることに気づかされました。基調講演では、わたくしは、以下のようにのべました。「韓国にあって、日本人の価値観を問うことは、日本にあって自己言及的に問うこととは異なった意味を有していることも、事実です。韓国から見た場合、かつて平然と侵略を敢行した日本や、今もそれを反省しないでいられる日本人の価値観が、言説上の問題ではなく、一つの実態として存在するように受けとめられることは、理解できるところです。そして、『和』『勤勉』『繊細』といった自己言及的なそれとは異なる日本像・日本人論が韓国に存在することについては、日本人が謙虚に受けとめる必要があることはいうまでもありません。だが、ここでは敢えて、そうした他者像とは、自己像と常に表裏のものとして存在してきたことに注意を喚起しておきたいと思います。したがって、韓国における日本人の価値観という問いも、実は韓国の自己表象と切っても切れない関係にあることは、いうまでもありません。それは、一国人文学を超えた韓国日本思想史であればこそその大きな可能性としてわれわれの前にあること、それは日本思想史学を自己言及的ではない、真に国際的なものとする上でも重要な課題だと思っています。この考えは今でもわたくしが韓国の日本研究に対して感じているこ

とであり、一見ステレオタイプ的に見える研究テーマも、相互に率直に意見交換できる段階に入っていることが重要に点だと思います。いわば、韓国の日本研究は、相互の自他認識を検討しうる新段階に入ってきているということです。こうした韓国での日本研究の新段階をリードしているのは、40代半ば前後の日本留学組の方々です。韓国では「3.8.6世代」（60年代に生まれ、80年代に大学生活を送り、90年代には30代だった人びと）といわれていますが、日本研究の新潮流をかれらが形成してきたことも、率直な議論を可能にしていると思います。かれらが日本、さらに中国・米国・英国などにも強力なネットワークを形成していることも注目されます。のちに紹介しますが、今年創立大会を迎えた、恐らく人文学では最初の東アジア的国際学会である東アジア宗教文化学会も、こうしたネットワークに依拠して初めて可能となったものでした。

次に中国の日本研究にも簡単に触れておきます。韓国と比較すると、量的には恐ろしいほど蓄積されている割には、その日本研究は未だ過渡期にあると、わたくしは感じています。まず、中華日本学会の『日本学刊』第3期（2007年）に林昶[リンチョウ]氏が「2006年中国の日本社会文化研究の概況」という論文を発表しています。それによれば、研究成果数は非常に多くなってきていて、『日本学術文庫』『人文日本新書』『中日文化研究文庫』『南開日本研究叢書』などのシリーズものも多数刊行されていることが理解されます。全体に「日本文化」「日本文学」に関するものが非常に多く、日本社会研究に関するものは多くはないと筆者はのべています。中日文化交流研究では、国際学術シンポジウムが頻繁に行われ、その成果が発表されている点が注目点として取り上げられています。

ところで、同じ林昶氏が1999年に「中国の日本研究の現状と存在する問題点」という論考を書いているのですが（前掲『中国における日本研究』）、それによれば「基礎理論的研究、総合的基礎研究の不足」「中国の近代化に寄与する研究分野への偏重」「人材の流失と後継者不足」「資料・資金の欠乏」などが、問題点としてあげられています。結論的にいえば、わたくしにはこの問題点は未だ中国の日本研究の問題点として存在しているように思います。この点を克服するためには、たとえば資料の提供や公表など、日本側の協力も重要ですが、何よりもイベント的シンポジウムから、共通のテーマに関して率直な意見交換を行いうる日常的な学会・研究会へ移行していくことが重要だと思います。

その意味でも、この夏に創立された「東アジア宗教文化学会」は、初めての人文学の日中韓の国際学会として重要な意義を有していると思います（日韓共同代表 島蘭進、日本側呼びかけ人 安丸良夫、桂島など30名、韓国側呼びかけ人 姜敦求、朴奎泰など30名。中国側呼びかけ人 郭連友、張憲生など30名。2008年8月に設立大会を韓国釜山で開催した）。この学会は、1980年代の個人的な交流から始まり、25年以上の蓄積を経て、ようやくにして本格的な国際学会にたどり着いたという意味では、率直な意見交換を行う場として発展していくことが期待されています。日本学関係者ばかりが集う場ではない点も、日本研究を開かれた場で行う意味では新鮮な点だと思います。また、宗教学を基軸として、歴史学・民俗学・人類学・社会学・文学・言語学など多彩な学問ジャンルの研究者が集った意義も大きいと思います。アジアにおける日本研究は、こうした学会の一ジャンルになることで、さらにいえば韓国学・中国学とも交流を築きあげることで、今新しい段階に入りつつあるのだと思います。この学会の「呼びかけ文」の一部を紹介して、この報告を終えていきたいと思っています。「日中韓の三カ国は歴史的に儒教、仏教、道教など共通の宗教文

化を共有しつつ、活発な交流を続け進展させてきました。このような共通の宗教文化の伝統と現実に対する研究をさらに増進・発展させれば、世界の宗教文化研究に寄与すると同時に、これまでとは異なる新たな観点から研究を深めていく機会も得ることができるでしょう。もちろん、日中韓三カ国は各国固有の民間信仰をはじめ、韓国のキリスト教と民族宗教、日本の神道と新宗教、中国のイスラム教と道教など、国ごとに多様で独特の宗教文化があり、その研究傾向も必然的に異なってくるでしょう。わたくしたちは本学会をこのような多様性と固有性を尊重しながらも、活発な研究交流と相互理解を増進できるものと期待しております。本学会は去る 2007 年 8 月、日韓宗教研究フォーラム第 4 回国際学術大会における提案によって創立準備委員会が組織されました。そして 2008 年 8 月には、韓国での創立大会開催が予定されています。日韓宗教研究フォーラムでは既に 15 年以上も宗教研究者と教学研究者の学問交流と共同研究を進めてまいりました。その過程でより体系的で広範囲に及ぶ東アジア宗教文化研究の重要性と必要性を切実に認識するようになりました。日中韓三カ国の 90 人の呼びかけ人はこのような設立の趣旨に共感し、特に宗教学、歴史学、人類学、社会学、民俗学などの宗教文化研究に関心のある人文社会学者と教学研究者が共に学際的研究を進めていけるものと期待しています。」

#### 【主要参考文献】

李盛煥「韓国における日本地域研究」(『啓明大学校日本学科創立 30 周年記念大会報告集』2007、テグ)。

『韓国の日本研究の現況と課題』(ハンウルアカデミー、2007、ソウル)。

林昶「2006 年中国の日本社会文化研究の概況」(『日本学刊』第 3 期、中華日本学会、2007、北京)。

日本国際教育協会『世界のなかの日本学』(ペリかん社、2003)。

『季刊日本思想史』 56 (ペリかん社、2000)。

『中国における日本研究』(北京日本学研究中心、1999、北京)。

『季刊日本思想史』 34 (ペリかん社、1990)。

『中国人の日本研究史』(六興出版、1989)。

【付記】本報告作成にあたっては、立命館大学大学院の諸点淑氏、金泰勲氏、肖琨氏、裴貴得氏の協力をえた。